

## 【漢字作品】牛窪 梧十 (うしくぼ ごじゅう)

日展監事 読売書法会常任総務 全国書美術振興会理事 「日本の書展」現代書壇巨匠

今回もさらに出品数が増え、実にさまざまな作品を審査させていただきました。

臨書は学書の根本ですので、どの段階にあっても真剣にとりくまねばならぬ一大事です。

半紙での基礎固めでは、徹底的な形臨により、原本の美のあり方を見逃すことなく、細部まで再現できる眼の力と、筆の技の獲得をめざさねばなりません。

半切に作品としてまとめるのは次の段階の第一歩となりますが、ここでは、どの古典のどの部分を何文字書くのかを決める力が、作品の成果に直結します。ただ古典というには客観性が大切ですので、珍しいだけのものを選ぶのは危険です。成長をめざす現在の自分にとって、栄養になる古典かどうかをよくお考えください。

臨書作品としては、その古典の味わいを最大限にいかす姿勢を大切にしつつも、自分自身の作品として、魅力的に書ききらねば、高評価は得られません。

造形芸術として、紙面に緊張とゆとりのバランスによる空間の響きが見えるかどうか。

時間芸術として、筆の運びから自然で充実した時の流れが感じられるかどうか。この両面を満足させねばならぬところに、書の面白さと難しさがあるのだと、改めて実感しながら審査が終了しました。

皆様のさらなるご精進を期待しております。

## 【かな作品】土橋 靖子 (つちはし やすこ)

日展理事 読売書法会常任総務 全国書美術振興会理事 「日本の書展」現代書壇巨匠

中国から伝わった漢字をもとに、私たちは我が国の風土の中で醸成された仮名を生み出しました。特に平安後期から鎌倉時代にかけて、仮名の美の究極とされる揺るぎない美を誇る名筆が数々生まれ、私たちはそれを古筆として学び、現代に生きる作品の礎としています。

さて、仮名古筆の臨書は基本的に原寸あるいは原寸に近い大きさで臨書するのが基本です。それは、あるがままから醸し出される全体美が仮名古筆の大いなる魅力であり、それを感じ享受しようとするは、自ずと原寸に近い形で学びたいものなのです。

とはいえ、拡大して臨書することを否定するものではありません。形、連綿、筆遣い、息遣いなど、着眼する点を自覚し、目的意識をしっかりとって拡大して学ぶことは有効なことです。

拡大臨書をするときは、古筆の持つ本来の美を一旦横に置く覚悟で、安易に流れず、緊張感を持って臨みたいものです。

どうかその点を意識し、仮名の学習を益々深めていただき、チャレンジし、作品の表現に活かしたり、日本独自の芸術文化としての一面に触れ、豊かな時を過ごしていただきたいと思います。

次回もたくさんの出品をお待ちしています。

## 【篆刻作品】和中 簡堂 (わなか かんどう)

日展特別会員 読売書法会常任理事 全国書美術振興会監事 「日本の書展」現代書壇代表

52回展への摹刻作品の中に、篆刻の始祖と仰がれる文彭・何震のうち、何震の「雲中白鶴」「聽鸛深處」という難易度の高い摹印がありました。側款の拓本まで付され、款文まで丁寧に摹倣されていて、古典に対する敬意が伝わり、ほほえましく感じました。

鄧石如の「太羹玄酒」「聊浮游以逍遙」なども出品されていて、真剣に摹刻と対峙しているという姿勢を伺え、しっかりとした指導者のもとで学んでいる人達の応募が多くなって来たと思えました。単なる篆刻を趣味として摹刻を出品されるには限界があるのだと、つくづく思った審査でもありました。

確かに摹刻は篆刻の基本中の基本で、先人達の叡知が蓄積された印影には魅力があります。古代の古璽、官私印、名人の刻印には文字学を逸脱しない章法や、工夫があり、独学では篆刻に習熟することに無理があるように思います。先輩なり、経験者に意見を聞くなりして、審美眼を高めるようにしていただきたいと思います。

いきなり新しいものは生れないと思いますが、名印の摹刻や目習いを積み重ねるうち、新しい発想や応用を思い付くやも知れません。またどの様に捺印したらいいのか、印泥はどの様に扱えばいいのか、そんな細かな工夫も摹刻を楽しくするものです。会場に出掛けて、いろいろな疑問を一つ一つ解決するようになっていただければ篆刻に対する愛着も深くなることと思います。